

〈特別企画「AJELの歩みを振り返る」〉

「大航海者」増田義郎先生を偲ぶ¹⁾

落 合 一 泰



日本ラテンアメリカ学会初代理事長
増田義郎先生 (1928–2016)
(写真提供: 朝倉理麻氏)

落合一泰と申します。ご紹介いただきましたように、増田義郎先生が設立に尽力され初代理事長を務められた日本ラテンアメリカ学会の理事長を、いま拝命しております。本学会が設立されたのは1980年6月8日、当初の会員数は160名でした。37年後のいま、会員数は570名ほどになりました。ラテンアメリカと日本の関係が今後緊密になるであろうことを予見して仲間と学会をお作りになり、学術の方面からその関係を支え推進しようとなさった増田先生の先見の明に、いま改めて頭の下がる思いであります。

増田先生を私が初めてお訪ねしたのは、大学に入学した直後の1970年4月でした。ラテンアメリカ人類学を学びたいと思ってのことでしたが、まだ人類学と考古学の関係も知らない18歳でした。駒場の第一研究室という古い建物の1階にあった増田先生のお部屋の書棚に整然と並んだ辞書類や雑誌類が、いまでも目に焼き付いています。「とにかくスペイン語と文化を現地で学びなさい」と、先生は素敵なおしゃべりでおっしゃいました。うかがうことすべてが新鮮で、自分が目指すべき方向はこちらだと確信したものでした。

増田先生は、それまで「地理上の発見」と呼ばれていた時代を「大航海時代」という名称で再定義した研究者として、不朽の名を残されました²⁾。その発端は、先生が英文学を専攻し、イギリス近代文学の起源、すなわち16世紀までの英文学が、その後リアリズムを獲得していった過程を研究なさっていたことにありました。そして、そこに見出しておられたのが、大航海時代の航海記録が与えた影響でした。

先生と海洋冒険小説は切っても切れない関係にあります。その背後には、イギリス近代小説の成立と大航海時代の関係という、大きなテーマがありました。たとえば船の難破の場面です。それまでの文学に紋切り型で描かれていたのとは違い、航海記録にはバラバラになった船の板材が波間で激しくぶつかり合い、海に落ちた船乗りたちの体を砕いていく様子が描かれていました。それが、新たなリアリズムとして、文学に取り込まれていったのでした³⁾。

増田先生の研究で、イギリス近代小説と大航海時代を媒介したのが、ルネサンス・スペインのピカレスク小説でした。ピカレスク小説は自伝体の一代

記の形をとるのがふつうですが、それと同じ形式で実在人物が自分の遍歴の記録を記した実録的作品が、数多く書かれていました。そのなかには新大陸の征服や略奪に加わった経験を記したものがかなりあり、増田先生はそれらを読破するなかで、大航海時代の航海者や征服者に対する関心を高めていらっしたのです。このように、観点をいくつも重ね合わせながら問題意識を研ぎ澄ませていく先生の手法は、ヨーロッパやラテンアメリカを個別に考えるのではなく、両者のつながりにおいて全体を把握するという、先生の一貫した複眼的歴史観を示すものでした⁴⁾。

増田先生が経済人類学や持続的発展概念を早くから日本に紹介していらしたことは、あまり知られていません。先生はニュー・ギニアの東のトロブリアンド諸島における、象徴的財貨の複雑な交換システム「クラ」を研究したポーランドの人類学者プロニスワフ・マリノフスキの『西太平洋の遠洋航海者』を、今からちょうど半世紀前の1967年に、中央公論社の『世界の名著』のなかで抄訳されています(マリノフスキ 1967)⁵⁾。また、カール・ボラニー、ジョージ・ドルトン、ポール・ボハナン、マーシャル・サーリンズ等の著作を教材とされ、「交換」という行為の多様性と構造を、大学院セミナーで取り上げていらっしました⁶⁾。アンデスの海岸部から高山地帯、そして熱帯雨林に至る様々な環境を利用した「垂直統御」という考え方を基軸に、生産物の流通、貯蔵、消費を分析したジョン・ムラの研究なども、1970年代なかばに教室でずいぶん読んだものでした⁷⁾。

環境利用への関心に基づき、増田先生は、1986年度から翌年度にかけて、科研費調査を組織されました。タイトルは、「中央アンデス南部における環境適応と資源利用の民族学的研究」でした⁸⁾。研究分担者に加えていただいた私はチリでの調査に参加し、北部のアントファガスタから最南端のプンタアレナス、フエゴ島まで、3か月間、先生とご一緒しました。海藻コチャユーヨの採集と乾燥、食品としての山間部への運搬、その過程での小麦との交換などのプロセスをたどり、また、小さな島に渡って漁民の暮らしぶりを見聞しました。先生は「再生可能海洋資源」recursos marítimos renovables と

という言葉を使っていたら良かったです。日本で持続的発展という言葉が人口に膾炙する前から、先生は適切な環境利用にもとづく再生可能資源に着目されていたわけです。

このように増田先生のご業績を振り返りますと、共通のキーワードとして「海」が浮かび上がってきます。もちろん、先生は、アステカ文明やメキシコ革命に関する一般書の出版⁹⁾、ゴドフリー・リーンハートの『社会人類学』の翻訳¹⁰⁾など、海に直接結びつかないお仕事も重ねておられました。しかし、思えば先生は、『コロンブス』、『略奪の海カリブーもうひとつのラテン・アメリカ史』、『太平洋一開かれた海の歴史』などをお書きです。翻訳においても、ジェームズ・クック『太平洋探検』、マリアノ・クエスタ＝ドミンゴ『図説航海と探検の世界史』、ロバート・ルイス・ステイーヴンソン『完訳宝島』、デイヴィッド・コーディングリ編『図説海賊大全』、ロバート・サウジー『ネルソン提督伝』、ブライアン・レイヴァリ『船の歴史文化図鑑—船と航海の世界史』、ダニエル・デフォー『完訳ロビンソン・クルーソー』など、大海原を舞台とするご業績は枚挙にいとまがありません。

こうした著作や訳業を拝見すれば、先生が海洋を生きること、そして海洋を語ることに、いかに深い関心を持っていたかが分かります。南太平洋トロブリアンド諸島を調査したマリノフスキやフィジー諸島やハワイ諸島を研究したサーリンズなどを媒介に、海を文化人類学の観点から語っただけではありませんでした。先生の心の奥底には、海洋冒険の時代への強い憧れがあったのではないかと思います¹¹⁾。

先生が亡くなられ、ご自宅に弔間に参りましたさい、ご家族から、先生はポルトガルについての本を書く考えでいらしたと伺いました。完成していただきたかったと、つくづく思います。きっとその本は、リスボンにほど近い、ユーラシア大陸最西端のロカ岬に立って大西洋を遠望する先生が、エンリケ航海王子らが活躍した時代から現代に至る、海洋国ポルトガルを物語る書物になっていたことでしょう。

あらゆる文筆活動において先生が際立っていたことのひとつは、先生が決

して複雑な文体に酔わず、表現したいことを分かりやすい言葉で正確に伝える文章家でいらしたことです。学生時代に先生に教えていただいた言葉にラコニズム laconism、ラコーニック laconic という英語がありました。簡潔な言葉で深い内容を表現するという意味です。饒舌、能弁の反対です。難しいことなのですが、先生はそれを楽々とやってのけていらっしやるように見えました。

「文は人なり」といいます。先生は、想像力と実証性を併せ持ち、しかも一読して理解できる文章を書かれていました。思えば、「想像」と「実証」とは、大航海時代の航海者たちのキーワードであったかもしれません。

最初に申しましたように、増田先生は「大航海時代」の命名者でした。いま振り返って思うのは、先生ご自身が、海に魅入られ、海を論じ、海を渡った「大航海者」だったということです。先生が翻訳されたマリノフスキの本のタイトルを借りれば、先生は「遠洋航海者」Argonaut であられました。

増田先生にとり、「海」とは大陸と大陸を隔てる空間ではなく、繋ぐ場でした。その昔、まだ大学1年生だった私は、先生に質問をしました。「陸と陸の間に海が挟まると、文化と文化が途切れるのではないですか？」先生は、「いや、君ね、遠い島からヤシの実が流れ着くように、海は切るのではなく繋ぐのですよ」とおっしゃいました。増田先生は、文学、歴史学、考古学、文化人類学という諸領域を当然のように往還し、ラテンアメリカを欧米の視座からも文明的に考察し、研究と教育を不可分のものとして捉えるというように、脱領域というより全領域的にかかわることによって初めて「ラテンアメリカニスト」たりうるという模範を見せてくださいました。いまこの「増田義郎先生を偲ぶ会」に立って思うのは、先生はここに集う私たちのことも、海のように繋いでくださっていたということでもあります。

先生の数日前に旅立たれた奥様・千年様が私たち学生をたびたびもてなしてくださったことも含め、思い出は尽きませんが、私のご挨拶はここまでにさせていただきます。増田先生、改めて、ありがとうございます。

註

- 1) 本稿は、2017年3月20日に開かれた「増田義郎先生を偲ぶ会」での筆者の挨拶を整え、註・参考文献を加筆したものである。筆者の日本ラテンアメリカ学会理事長職は当時。
- 2) 「大航海時代」という名称は、岩波書店刊行の『大航海時代叢書』の総題となり、一般的用語として社会に広まった。同叢書は、第Ⅰ期全11巻・別巻1(1965-1970)、第Ⅱ期全25巻(1979-1992)から構成され、エクストラ・シリーズ全5巻(1985-1987)も同時に出版された。増田先生は、この大事業に当初から参画され、第二期では編集委員を務められた。
- 3) 17世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパではアメリカ大陸に想を得た小説や戯曲、詩やオペラ等が数多く書かれた。悲劇 *The Indian Emperour, or the Conquest of Mexico by the Spaniards, being the Sequel of The Indian Queen* (1665) を著したジョン・ドライデン (John Dryden, 1631-1700)、夏目漱石の『三四郎』(夏目 2006: 100-103) にも名前が登場する *Oroonoko: or, the Royal Slave. A true History* (1688) のアフラ・ベーン (ペイン, Aphra Behn, 1640?-1689)、*Pizarro; A Tragedy, in Five Acts* を1799年に初演したりチャード・B・シェリダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751-1816) 等、イギリスで活躍した作家、劇作家、詩人も多かった (cf. 落合 1997; キムラ=ステューベン 1982, 1995: 26-36; 福岡 2017; ペイン 1988)。
- 4) ピカレスク小説、征服者の記録、近代小説に対する一体的関心については、増田先生ご自身が詳述している (増田 1969)。先生は、ハーバード大学で研究生活を送った1960年から62年にかけて、ピカレスクの自伝や年代記をワイドナー図書館で徹底的に読み込んだそうである。その勉強ぶりはすさまじく、先生は、「今から考えてみると、なにか深い興奮にひたりながら無我夢中で勉強していた期間のように思われる」(増田 1971: 219) と1971年に記し、2001年にも、「毎晩閉館まで大学図書館でアンデス資料を読みふけた時の興奮が、懐かしく思い起される」と回想している (増田 2017: 242)。

増田先生の複眼的視野に日本文化論が収められていたことも、忘れられてはなるまい (e.g. 増田 1967, 1977b)。先生は、編集を担当した日本文化論集 (増田 1977a) に民族学者や文化人類学者など比較の視点をもつ寄稿者を起用している。そして、エズラ・ヴォーゲルやジョン・ホールなど「アプリアリに比較の視点」を持つ外国人研究者も論文を寄せているので、読者はこの一卷から「多くの有益な刺激」を得られるだろうと述べている (増田 1977a: i-ii)。外国人研究者に比較の視点が内在しているならば、ラテンアメリカでは「外国人」である日本人研究者も、「アプリアリに比較の視点」を持つことに

なる。増田先生は、そこに国際的な対話の糸口のひとつを見出していた。先生がアメリカの人類学者フレッド・エガンの厳密な比較方法論に関する論文 (Eggan 1954) を学生に薦めていたことが示すように、先生は方法論としての比較に関心があったのであり、国や民族を単位とした文化の本質論的比較対照を最終目的としていたわけではなかった。

- 5) 増田先生は、のちにこれを再編集し、1967年版の「原住民」を「住民たち」に置き換えるなど、著者名を含めた補正を加え、2010年に再刊行した (マリノフスキ 2010)。
- 6) e.g., Polanyi (1957)。大学院セミナーでは、経済活動分析に形式主義的 formalist アプローチと実質主義的 substantivist アプローチがありうることを論じたこの論文のほか、ダホメー王国における交易、バルベル社会の交易、インド村落における互酬と再分配等に関する多くの論文を輪読した (e.g., Firth, ed. 1967; Polanyi, Arensberg and Pearson, eds. 1957)。互酬性の類型理論については、Sahlins (1972) を読んだ。増田先生ご自身、ポラニー、サーリンズ、ジョン・ムラ、モートン・フリード、エルマン・サーヴィスらの研究業績を系統的に紹介する論考を発表していた (増田 1973)。
- 7) e.g., Murra (1972, 1975), cf., ムラ (1977)。
- 8) 科学研究費補助金研究課題／領域番号 62043015、研究種目 海外学術研究、研究期間 (年度) 1986-1987、研究成果報告書 Masuda (ed., 1988)。
- 9) 増田 (1963, 1968)。
- 10) リーンハート (1967)。
- 11) 増田先生のこの関心が、徹底的に批判的であった軍国主義日本の地理的拡大とどのような関係にあったのか、また、戦後の日本に生まれた非西欧諸文明への社会的関心 (たとえば、「世界四大文明」史観) と先生の世代のラテンアメリカへの関心には、どのような連続性があったのか、先生に何う機会はなかった。戦後団塊世代のラテンアメリカ研究者の多くが、キューバ革命、第三世界論、ラテンアメリカ文学のブームなどから刺激を受けて学問を志したのに対し、それに先立つ戦中派の研究者のラテンアメリカへの知的関心の根源がどこにあったのかは、日本のラテンアメリカ学史の一環として、今後考究されるべき課題かもしれない。

参考文献

- 落合一泰. 1997. 「東方の驚異, ワイルド・マン, インディアン, グリーザー—近代西欧〈民族人類学〉によるアメリカ大陸の〈占有〉—」船曳建夫編『講座 文化人類学／第1巻・新たな人間の発見』141-180ページ, 岩波書店。

- キムラ＝ステイーブン 千種. 1982. 「『三四郎』試論:『オルノーコ』の意味」『国文学 解釈と鑑賞』47巻11月号, 193-199ページ。
- . 1995. 『『三四郎』の世界—漱石を読む』翰林書房。
- クエスタ＝ドミンゴ・マリانو. 1995. 『図説航海と探検の世界史』増田義郎・竹内和世訳, 原書房。
- クック, ジェームズ. 1992-1994. 『太平洋探検』増田義郎訳, 岩波文庫。
- コーディングリ, デイヴィッド編. 2000. 『図説海賊大全』増田義郎・竹内和世訳, 東洋書林。
- サウジー, ロバート. 2004. 『ネルソン提督伝』増田義郎監修, 山本史郎訳, 原書房。
- ステイーヴンソン, ロバート・ルイス. 1999. 『完訳 宝島』増田義郎訳, 中公文庫。
- デフォー, ダニエル. 2007. 『完訳 ロビンソン・クルーソー』増田義郎訳, 中央公論新社。
- 夏目漱石. 2006. 『三四郎』ワイド版岩波文庫。
- 福岡利裕. 2017. 『アフラ・ベーン 「閨秀作家」の肖像』彩流社。
- ペイン, アフラ. 1988. 『オルノーコ・美しい浮気女』土井治訳, 岩波文庫。
- 増田義郎. 1963. 『古代アステカ王国—征服された黄金の国』中公新書。
- . 1967. 『純粹文化の条件—日本文化は衝撃にどうたえたか』講談社現代新書。
- . 1968. 『メキシコ革命—近代化のたたかい』中公新書。
- . 1969. 「ピカロと征服者」『波』11・12月号, 19-24ページ, 新潮社。
- . 1971. 『新世界のユートピア』研究社出版。
- . 1973. 「伝統的社會の構成とその近代の変容」玉野井芳郎編『文明としての経済』48-84ページ, 潮出版社。
- . 1977a. 「まえがき」伊東俊太郎他編『講座 比較文化』第6巻, 増田義郎編集担当『日本人の社会』i-iiiページ, 研究社出版。
- . 1977b. 「どこに帰属して生きるか」伊東俊太郎他編『講座 比較文化』第6巻, 増田義郎編集担当『日本人の社会』103-120ページ, 研究社出版。
- . 1979. 『コロンブス』岩波新書。
- . 1989. 『略奪の海カリブ—もうひとつのラテン・アメリカ史』岩波新書。
- . 2004. 『太平洋—開かれた海の歴史』集英社新書。
- . 2017. 『インカ帝国探検記—ある文化の滅亡の記録』中公文庫。
- マリノフスキ, プロニスワフ. 2010. 『西太平洋の遠洋航海者—メラネシアのニュー・ギニア諸島における住民たちの事業と冒険の報告』増田義郎訳, 講

談社学術文庫。

- マリノフスキー, B. 1967. 「西太平洋の遠洋航海者—メラネシアのニュー・ギニア群島における原住民の事業と冒険の報告」寺田和夫・増田義郎訳『世界の名著 59 マリノフスキー レヴィ=ストロース』泉靖一責任編集, 55-342 ページ, 中央公論社。
- ムラ, ジョン・V. 1977. 「インカの政治構造をめぐって」落合一泰訳『現代のエスプリ』125号, 155-167 ページ。
- リーンハート, G. 1967. 『社会人類学』増田義郎・長島信弘訳, 岩波書店。
- レイヴァリ, ブライアン. 2007. 『船の歴史文化図鑑—船と航海の世界史』増田義郎・武井摩利訳, 悠書館。
- Eggan, Fred. 1954. "Social Anthropology and the Method of Controlled Comparison," *American Anthropologist*, New Series, Vol. 56, No. 5, Part 1, pp. 743-763.
- Firth, Raymond. ed. 1967. *Themes in Economic Anthropology*. A.S.A. Monographs, 6. Tavistock Publications, London and New York.
- Masuda, Shozo. ed. 1988. *Recursos naturales andinos*. Universidad de Tokio.
- Murra, John V. 1972. *El Control Vertical de un Máximo de Pisos Ecológicos en la Economía de las Sociedades Andinas*. Universidad Nacional Hermilio Valdizán, Huánuco, Perú.
- . 1975. *Formaciones Económicas y Políticas del Mundo Andino*. Instituto de Estudios Peruanos, Lima, Perú.
- Polanyi, Karl. 1957. "The Economy as Instituted Process," in Polanyi, Arensberg and Pearson, eds., pp. 243-270.
- Polanyi, Karl, Arensberg, Conrad M., and Pearson, Harry W., eds. 1957. *Trade and Market in the Early Empires: Economics in History and Theory*, The Free Press, Glencoe, Illinois.
- Sahlins, Marshall. 1972. *Stone Age Economics*. Aldine-Atherton, Chicago.